

石田梅岩著・城島明彦訳「都鄙問答」致知出版社 2016 年 9 月 25 日刊を読む

「吾唯足るを知る」ことが大事

1. 文学を自慢する者を喩えていうと、人の財産と比較しては「あいつは劣っている」「自分の方が上だ」などと自慢するのと同じである。そういうことは、文学者として最も恥ずべきことだ。金を稼ぎ、儲けて、支出を^{けち}吝れば、財産は自然に貯まっていくものだ。文学も、そのようなもので、年数を重ね、ぬかりなく学び続けていけば、そうしない者より確実に勝っていくだろう。その間、覚えるべきものは覚え、必要なことはいっぱい書き残すようにすれば、多くの人々がひしめく中で、幸せを掴み、生活も豊かになろうというものだ。
2. 学者としては、ただ単に書物をたくさん読むというだけでは、そこに記された聖人の意図とか真意といったものや『日本書紀』などの史書の奥深いところまで知ることはできないのである。だが、あなたは、そこまで考えてはおらず、書物に綴られた文章をすらすらと読めて、その文意さえ掴めたら、それ以上のことは必要ないと思っている。そういう姿勢は、真の意味を探ろうとして推論を重ねる考え方とは雲泥の違いがある。
3. こんな話がある。ある儒者の親戚筋にあたる顔見知り、田舎へ行商に通っている^{あきんど}商人がいた。儒者がその商人に「あなたも少しは学問をした方がよいのではないか。どう考えても無学だ」というと、商人はこう反論した。
「自分はちっとも無学だなどと思っていない。このように絹の布に値札をつけたりしている。もっとも、どこの国で売ったらいいかという当てはまだないが、これまで商品を売買して父母や妻子を養い、家の大黒柱として家の中をうまく治めてもきた。だから、やる気になって、あなたのように読み書きを学んだら、すぐに書物も読めるようになるはずだ。どうだろう、あなたも一日でいいから私の代わりに行商をやってみてはどうか。自分には商売のことはわからないというのであれば、私とちっとも変わらない。自分の職分さえわきまえたら、それで事足りるのだ。この程度の理屈がわからないようなら、学者として大きな顔はできないではないか」
4. その儒者は、京都市中で誰それとその名を知られた人物なのだが、商人のいったことを否定する道理を明らかにすることができず、何も答えなかったのである。
5. 文学の道に通曉していなくても、老子のいった「^{われただたるをしる}吾唯足知」（吾唯足るを知る）者は、かくの如しである。ましてや、「性理」（人の本性を天地の道理）に明るい者が文学の道にも精通することができるなら、間髪を置かずに「聖学」（聖人の学問）が勃興し、世の中に広くゆき渡るだろう。
6. 『孟子』（梁恵王上篇）に次のような一節がある。
「盛夏の頃、日照り続きで苗が立ち枯れたと思えたそのとき、空にむくむくと雲が湧いて出て、雨

が激しく降りしぶき、苗がむっくりと起き上がった」(七、八月の間、^{ひでり}旱すれば則ち^か苗^{ゆうぜん}稿る。天油然として雲^{おこ}を作し、沛然^{はいぜん}として雨^{くだ}が下せば、則ち^{ぼつぜん}苗勃然として之^{これ}に興^{おこ}る)

7. だから、文武両道に秀でた士で、「性理」に通じた者が今の世にいることを私は強く願うのだ。あなたも「一理」を明らかにできるようになれば、そのときこそ、『日本書紀』の「神聖^そ其の中に生れます、國常立尊^{ごう}と號す」の意味を理解し、天が与えてくれる楽しみを満喫できるように誠を尽くしながら、真実の道に入られるようにされたい。

P283 ~ 285

<コメント>

江戸時代の思想家の石田梅岩の名著「都鄙問答(とひもんどう)」の全文現代語訳。この城島先生の現代語訳によって、現代人にとって難解で最後まで読み切る人がほとんど存在しないといわれる岩波文庫版の「都鄙問答」を全文読み終える機会に恵まれることができる。有難い限りだ。

— 2016年8月28日(日) 林 明夫記 —